

## 第 60 回 日本サミュエル・ベケット研究会 発表用紙

2023 年 7 月 15 日 (土)  
東京工業大学 大岡山キャンパス

### 「千にひとつのケース」における「間隙」での出会いと別れ

江刺佳紘(北海道大学大学院博士後期課程)

「千にひとつのケース」(1934)のクライマックスで、幼少期の体験を引きずる内科医ナイはトラウマを解消する。だが、ベケットはナイがトラウマを克服したという結果を読者に与えておきながら、その内容が「あまりにも些細で個人的なのでここで詳述する必要はない」と書いて説明を省いている。先行研究は、語り手によって隠蔽されたナイの苦悩の解明、あるいは、「ケース」の特定を目指して、精神分析的な読みを中心に作品の解釈をおこなってきた(オハラ、ゴントルスキー、ラビノヴィッツ)。しかし、ジョン・ピリングが *Samuel Beckett's 'More Pricks Than Kicks'* (2011)で指摘するように、作品内に隠された謎を暴こうとする読みは、多数の解から選択されたあるひとつの解を提供するにとどまり、包括的な作品の理解には至っていない。ピリングはこうした状況を踏まえ、『並には勝る女たちの夢』(1992)出版の失敗後、『蹴り損の棘もうけ』(1934)の執筆を経て『マーフィー』(執筆開始 1935、出版 1938)へと向かうベケットの創作プロセスのなかで本作を読解するアプローチを提示している。

本発表は、ピリングの議論を踏まえた上で、短編を詳しく読み直し、登場人物が「間隙」(intervals)のなかで機械的にコミュニケーションをおこなう形式をベケットが構築したのはいか、と提起したい。ベケットは本作において空間と時間を細かく分割し、その狭間で登場人物の出会いと別れを描いている。たとえば、ブレイ少年の手術は二度に分けて書かれているが、ナイとブレイ夫人の再会と解散は、この手術の前後に割り込む形で反復される。また、少年の手術をおこなう外科医ポーは、休診中のナイを二度病院に呼び寄せ、ブレイ夫人と引き合わせる。本発表では、本作と共に *The Bookman* に掲載された「最近のアイランド詩」で、ベケットが偽名を使って議論している「裂開」や、『並には勝る女たちの夢』でベラックワが読者の経験の場として指定する「間隙」なども参照しながら、ベケットの方法論を探究する。

## Meetings and Partings Between Intervals in “A Case in a Thousand”

Yoshihiro Esashi (Hokkaido University)

In the climax of “A Case in a Thousand” (1934), a short story published in *The Bookman*, Dr. Nye overcomes his trauma. Beckett presents the reader with the outcome, but he omits the explanation of its source, writing that his trauma is “so trivial and intimate that it need not be enlarged on here”. Critics have attempted to uncover Dr. Nye’s trauma and interpret what the “Case” signifies, by psychoanalytic readings of the work (O’Hara, Gontarski, Rabinovitz). However, as John Pilling points out in *Samuel Beckett’s ‘More Pricks Than Kicks’* (2011), these readings that attempt to unravel this mystery only show one interpretation from among numerous possibilities, and fail to provide a comprehensive analysis of the work. Pilling proposes an alternative approach that interprets the work in the context of Beckett’s creative process, including his failure to publish *Dream of Fair to Middling Women* (1992), his achievement to publish *More Pricks Than Kicks* (1934) and his writing of *Murphy* (1938).

Based on Pilling’s discussion, this presentation rereads this short story and suggests that Beckett constructed a form in which the characters mechanically communicate with each other in “intervals”. In this work, Beckett minutely breaks down space and time, and his characters meet and part in the middle of their actions. For instance, the surgeries on the boy Bray are separately performed, and the reunions and partings between Nye and Mrs. Bray are intervened before and after the surgeries. Surgeon Bor, who operates on the boy, interrupts Nye’s recess and vacation to call him to the hospital to meet with Mrs. Bray. For the purpose of exploring the writing principle of Beckett, this presentation also refers to the “rupture” that Beckett discusses in “Recent Irish Poetry” which appeared together with the short story, and to the “intervals” that Belacqua mentions in *Dream of Fair to Middling Women*.

## 日本の文学における 1990 年代以後のベケット受容:保坂和志の著作を手がかりに

木内久美子(東京工業大学)

日本サミュエル・ベケット研究会の三十周年記念にあたり、私は日本におけるサミュエル・ベケットの著作の受容のうち、特に 1990 年代以降の日本の小説や散文への「影響」を、関連する著作や評論、雑誌記事などのリソースを用いて調査している。本発表ではこの調査のキーパーソンである小説家・保坂和志が、その著作においてどのようにベケットによる影響やベケット的なものを同定しているか、またそれとは別に、彼が著作においてベケットを読んだ体験をどのように展開しているかを検討する。

発表では『アウトブリード』『小説の自由三部作』『試行錯誤に漂う』などのエッセイ集のうち、保坂がベケットに言及している箇所を特に取り上げる。保坂は時間芸術としての小説の運動性を重んじ、その運動性を静的に捉えさせるような主題の同定を嫌っている。とはいえそこには、ハイデガーへの言及によって取り出されている主題がある。本発表はその主題を確認したうえで、保坂がそれを説明するのではなく極力示そうとする論述方法にも着目する。

さらに『異常論文』に収録された「ベケット講解」を取りあげる。この作品には論文という体裁から出発しつつも逸脱することを想定されている。ここで保坂はエッセイとも論述ともつかない叙述法を用いて、アカデミズムのベケット研究のありかたを批判しつつ、歴史的にも間テクス的には影響関係のないベケットの小説作品とアビラの聖女テレサによる『靈魂の城——神の住い』を並べて読解する。その論述の引用と註釈の手つきは、ベケットのジョイス論にも似ている。本発表ではまた保坂の小説作品にみられるベケットの「影響」にも言及する。

最後に保坂和志という小説家につらなる日本の作家の系譜を概観する。保坂による小島信夫の評価、佐々木敦による保坂の評価、また保坂の年下世代にあたる小説家・作家にたいする保坂の評価などをまとめつつ、過去三十年のベケットの「影響」なるものとは何なのか、そもそも「影響」とは何かという点についても考えてみたい。